

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児③

浅田 朋子

6月、双子の娘たちの小学校卒業式が行われた。式は小学校5年生のA・Bクラス合同である。

日本では「卒業式」は重要な行事で、式の予行練習もしっかりと行うが、双子を見ている限りそんな様子は一切ない。「歌の練習とか、卒業式の準備してるん？」と聞くと、「う～ん、ダンスの練習してるかな」という。ダンス・・・？「でも、内緒。お楽しみだから」。いや、卒業式にサプライズはいらんやろ。日本ほどの厳粛さは絶対はないと思うが、それなりの正式なセレモニーをするであろうと期待していたが、実際は全く違った。

まずは、時間設定がすでに「12時40分くらいに開始」と、何ともまあ中途半端。もちろんプログラムなんてあるわけない。場所は「校庭」。学校に体育館はあるが、狭いので校庭で行うしかないのである。

12時15分ごろに校庭に行くと、先生と保護者代表者たちが準備していた。担任の先生は教室に生徒たちといるので、担任以外の先生たちが準備をしていた。長テーブルに赤のテーブルクロスをかけ、スピーカー、ステレオを設置している。しばらくすると大きな風船の束を持ってきてテーブルにくくりつけた。まるで誕生日パーティーみたいである。

30分ごろからパラパラと親たちが集まってきた。みんな様に服装はラフである。校庭に椅子などは用意されていないので、みんな立って好き勝手

に大声でおしゃべりしながら時間がくるのを待っている。時間になると、子供達が先生に先導されて校舎から走り出てきた。長机あたりに皆が集まり、進行役と思われる先生がマイクを持ち「みなさん！今日はとうとう学校最後の日になりました！」と言うと、わーっと歓声と拍手が起こる。校長や教頭は出席していないので、担任の先生から卒業生への言葉があった。

「みなさん5年間がんばりました！」という至って平凡な挨拶なので感動はなし。

それが終わると「さあ、ここで卒業生のダンスを披露します！」とアナウンスが流れ、子供達がばあ一つと広がりポジションにつく。英語のダンスミュージックが流れ、子供たちが踊り出したのだが、あまり練習できていないのか、まずまずの仕上がり。昭和のおばちゃんとはダンスじゃなくて、「揚げば尊し」とか「贈る言葉」とかの合唱が聞きたいねん、それで感動の涙を流したいのよ・・・、と思いながら隣にいるクラスのお母さんを見ると、携帯で動画を撮りつつ、涙しているではないか。これで涙できるとは、すごい感受性である。こんなダンスミュージックのぐてぐての踊りで、5年間の我が子の成長を感じれる？いや、反対に将来が心配になるだろ。

中途半端なダンスが終わった後、卒業証書の授与が始まった。授与も担任の先生が生徒の名前を呼び、さっと渡すだけなので、日本のような厳

肅な雰囲気もなく、あっという間に終わった。どんな卒業証書なのかワクワクして娘に見せてもらって、再び愕然。先生の手作り感が満載の、カワイイ柄入りの卒業証書だった。…これが卒業証書？割印が入り、卒業生「第何号」と記載されている日本との差よ。小学校とはいえ、この卒業証書には本当に驚いた。イタリアは公立校でも学校によってかなり差があるので、このような先生の手作り卒業証書は私たちの学校だけかもしれないが、学校印もなく先生たちのサインだけなので、公立小学校共通の決まりがあるわけではなさそうである。「なんかさ、これって…ほら、簡単なイタリア語のワークブックの最後に付録でついてくる証明書みたいやねー」というと娘に睨まれた。

最後はみんなで風船を離して終了。何の感動もなく、一時間ほどで卒業式は終わってしまった。これで、幼稚園から8年通った学舎ともお別れか…と、ふわふわ飛んでいく風船をぼんやりと見上げた。

卒業式の日の夜には「cena di fine anno scolastico（卒業夕食会）」があった。保護者が段取りをし、先生を招待して夕食会をするのである。卒業式がイマイチだっただけに夕食会も不安が残る。この夕食会には昼間の卒業式に参加できなかった保護者もほぼ全員が出席していた。こちらは皆おめかしをして「festa（パーティー）」らしい華やかな装いだ。

場所はローマ市外の広い庭があるレストラン。披露宴などにも使われるので大人数で入れるし、広い庭にはアスレチックやブランコなどの遊具もあって、子供達が遊べるようになっている。

会費は大人25ユーロ、子供20ユーロ、ピッツァがメインのドリンク付きコースで、アンティパスト（前菜）は supplì（ライスコロッケ）、fritto di baccalà（たらふライ）、ブルスケッタなど、ピッツァはマルゲリータなど4種類ほどのピッツァが用意されている。

アルコールは別料金で各自支払うのだが、最後に集計すると合わなくなるので、各自注文をするたびに、すぐに会計係のお母さんに払う方式がとられた。「いちいち面倒くさいから」とビール 3 杯分まとめて先払いしているパパがいて、夫と「うん、わかるよね」と頷き合った。大体飲む人は一杯で

は終わらないのである。

席は適当に着席。私は夫の横に座ったが、夫婦離れて座る人も多い。お父さんたちは「くつろいで楽しく飲む」ために妻から離れるのである。そういう時のお父さんたちの席を取る速さはすごい。ススとお父さんたちの席が確定した。まあ、どちらにしても最後はお母さんたちに「ちょっと！あっちに詰めて！」と言われたらその通りにするしかないのだが。

私の隣には、入学以来、挨拶くらいしか交わしたことのないオランダ人のお母さんが座った。英語は母語のように話せて、イタリア語もペラペラである。雰囲気から何となく苦手だなあ、と思っていたお母さんだったので、隣になりちょっと気まずい思いがしたのだが、彼女の方から「何年イタリアにいるの？」とか「どうしてイタリアに来たの？」とか話しかけてきた。思っていた印象と違い、人懐っこくおしゃべりなので、すぐに緊張がほぐれた。他の親たちから「バリキャリで、ちょっと自信過剰」という噂を聞いていたのだが、実際に話してみると「色々仕事で苦労や失敗をしたが、めげずに前進してきた人」だとわかった。仕事でまあまあな失敗をしているのに、それを面白おかしく話すので、私も夫も大笑いした。「英語が喋れるイタリア人にもイタリア語で話したほうがいいの、イタリア語で話すとすぐに打ち解けられて仕事がスムーズにいくのよ～」と言った。仕事では英語を使うのでイタリア語を使わなくても問題ないのだが、イタリア人の同僚や取引先のイタリアの会社のためにイタリア語をマスターしたらしい。「この国に住むと苦労するわ～！」と白ワインを飲みながら笑っていた。

楽しい時間はあっという間に過ぎていき、最後にレストランの庭で写集合写真を撮り、子供たちから担任の先生に感謝の言葉を述べた。

先生は一人一人を見つめながら「皆さんと一緒に過ごせて、心から感謝しています。新しいことを学び、熱意を持って授業に参加し、成長する姿を見てきました。いつも好奇心旺盛でいてください。好奇心は「学び」「発見」「探求」する助けとなるでしょう。失敗を恐れなくてください。失敗は多くのことを教えてくれますから。これから先も、今のまま素直で、そして自由に、生きる喜びを感じて毎日

を過ぎてほしいと願っています。」と話した。

真っ暗な中、慌てて撮影した集合写真、お母さんの話、先生の言葉。卒業式よりも、良い思い出となる夕食会だった。

コロナウィルス感染症が爆発的に流行した2020年に小学校に入学した子供たち。コロナ禍において急速に加速したデジタル化、目まぐるしい発展を見せるAI技術、溢れる情報、変化していく生活様式。

大人の私たちですら、この変化に吞まれ「人生の大切なもの」を見失ってしまう。

先生の言葉のように、子供たちが生きる喜びを感じ、毎日を幸せに過ごせるように心から願っている。

(元当館語学受講生)



【最後の教室の写真】

<オンラインレッスン随時受け付けております>

受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。

zoomを使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです！

- ・関西圏以外や海外にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方
- ・外出を控えられている方



* ロダーリ愛好者による イタリア式バール入門 *

竹田 理乃

イタリア語を学び始めてすぐの大学生時代からずっと、カフェことエスプレッソが飲みたくなれば大阪某所の某店でお世話になっていたのですが、私とお店の定休日がうまく噛み合わなくなってしまった関係で、ここ数年はかなりご無沙汰気味になっていたところ、素晴らしいバリスタさんが神戸にバールをオープンしてくださって、私のクオリティ・オブ・ライフが急上昇しています。大阪のお店にはなかなか顔を出せないせいで取材許可を取りに行くことすらできませんでしたが、神戸の方はバリスタさんが快くOKをくださったのでお店の名前まで出してしまいますと、みなと元町駅の近くにある Pasticceria Bar Pinocchio di Calimero さんのことです。



【Bar Pinocchio のセミフレッド】

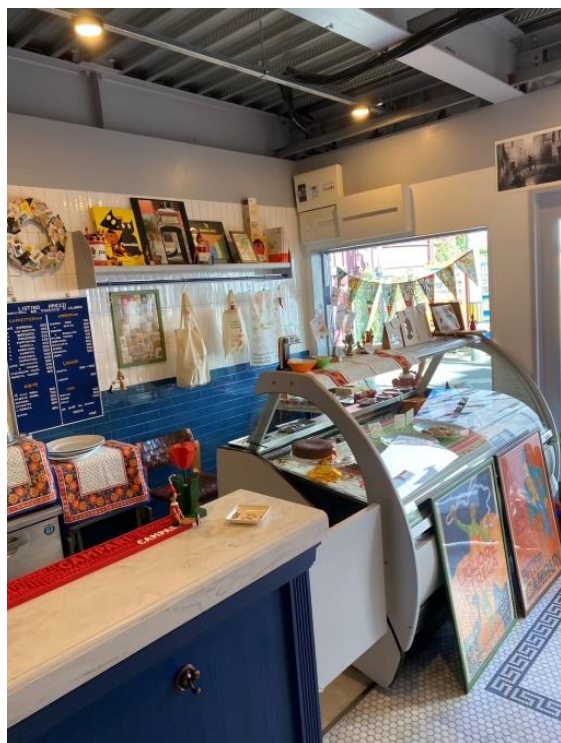
まず、バールとはなにか。こういうのはイタリアの定義を調べた方がいいのかなと思ったので、ボローニャで買った伊伊辞典を久しぶりに引いてみたところ、コーヒーやミルク、お茶、アルコールやアルコール抜き飲み物を飲むことができる公共の場所とありました。なるほど、でも、ここで「つまり喫茶店ね」と納得されてしまうと、なんだかちょっと袖を引っ張りたくなります。ナポリの有名ピッツェリアの話も、シラクーサで見つけたいい感じのトラットリアの話も、地図を片手に道案内つきでさせていただくのは吝かではないのですが、私はバールの話もしたい。身近なところにイタリア好きがうろうろしている環境を出て、野良のイタリアおたくとして日本の一般企業に勤めておりますと、お食事処や居酒屋さんのようなお店についてはなにげなく話題に出してもなんとなくイメージを共有できている手ごたえがある一方で、なぜだかバールという空間についてはあまり上手くいっていない気がしてしまいます。

しかしながら、奇妙な上から目線で「なぜだか」なんて困惑してみたところで、私だってバールとのファーストコンタクトは教科書の紙面で、第一印象は「つまり喫茶店ね」でした。英語式にバーと発音して、先生にちょっと嫌な顔をされたのを覚えています。その機微、今ならよくわかります。でもまあ、百聞は一見に如かず。エスプレッソはスターバックスの甘いドリンクの材料のひとつだと認識していた日本育ちのイタリア語初学者も、一度イタリアおたくの先輩に大阪の某店へ連れて行っただけで、イタリア式のバールはバールであり、日本式の喫茶店とは違うらしいぞと理解できるようになりました。

イタリア式のバールと日本式の喫茶店を比較してみると、まずはお店の構造の違いに気づかされます。喫茶店は基本的にお客さんみんなが着席してくつろぎますが、バールには入店すると真っ先に目につくバンコと呼ばれるカウンターがあり、ここで立ち飲みするか、追加料金がかかることもあるテーブルとイスに落ち着くかを選ぶことができます。立ち飲みのお客さんが寄りかかっているバンコの奥には、大きなエスプレッソマシンを軽快に操るバリスタさんがいます。ここまでが基本

のかたちで、あとはお店によって奥の棚にアルコール類のボトルがずらっと並んで輝いていたり、ガラスケースのなかに朝ごはんにぴったりのコルネットや息抜きサイズのドルチェが並んでいたり、お土地柄によってはお土産物や絵葉書なんかが売られていることもあります。大きなお店ならばパニーノどころではないお食事だって楽しめますし、シチリアのバールでビールを片手に揚げたてのアランチーノ(もしくはアランチーナ)にかぶりつけば、私にはそれだけでお腹いっぱい晩ごはんになります。

私が好きになるバールはだいたいコルネットやドルチェが充実しているところで、数か月ごとに変わるメニューでイタリア各地のお菓子を披露してくださる神戸のピノッキオさんもこのタイプです。なにを頼んでも間違いはないのですが、初夏の頃にやっていらしたセミフレッドは特においしくて、気がついたらその場に居合わせた知らない人にオススメしていました。



【Bar Pinocchio の店内】

このあいだピノッキオのバリスタさんとお話をしていた、バールというのはちょっとお喋りしに来るところで、まあ来たんだったらカッフェーくらい飲ん

でいってよといった感じの空間なんじゃないかなあ……というご意見をお聞きし、そうそう、こういう雰囲気のパールが好きなんですわと膝を打ちました。バリスタさんであったり、近所に住んでいる常連さんであったり、なにかのめぐり合わせでここに居たいちげんさんであったり、顔を出せば誰かがいて、話し込むこともあるし、そうじゃないこともあるけど、とにかく挨拶くらいはして、おいしいものを口に運びながら声帯や鼓膜や脳を気持ちよくストレッチできる場所、そこがバールで、その場所を取り仕切るのがバリスタさんなんじゃないかなあ……いくらおいしいカッフェーを出していただけても、居心地のよくないバールには通いませんし。

そう考えると、甲子園球場の近くにできたクレープ専門店ふたごのたまごさんに足が向くのも、もしかするとバール恋しさなのかも知れません。もちろんクレープがおいしくてお邪魔しているのですが、ふたごの店主さんたちが息を合わせて立ち働く様子や、おじょうちゃんからおっちゃんまで幅広い客層の方々が小さなカウンターに気安く肘をついている雰囲気がとにかくいい。店主さんたちの挨拶の朗らかさに誘われたお客さんがてれっとリラックスして、ひと言ふた言かけながら出入りする感じのよさがいい。ヌテッラのクレープはありませんが、そこは画竜点睛を欠くといったところのイタリアおたくにしかわからない未完の美。パニラはちみつアーモンドのアイスクリーム入りクレープを握って目を閉じると、イタリアの小さなジェラート屋さんにいるような趣きを感じます。

しばらくイタリアで過ごす《私のバール》という認識が発生します。とにかく店数が多いですし、歴史や特色のある有名店もありますから、いろいろ入ってみるのも楽しいのですが、なんとなく足が向いて再訪したバールで、昨日も働いていたバリスタさんから「あら、戻ってきたね」なんて笑いかけていただけると、定番のカプチーノとあわせて前は選ばなかった味のコルネットを注文しながら、ここがこの街の《私のバール》だなあと嬉しくなりがちです。

なお、いいバールの条件としてバリスタさんのお人柄を第一に挙げてみましたが、過剰な感情

労働を求めて迷惑客になり果てるのはごめんです。伊伊辞書にも「公共の場所」とありましたし、不躰にバリスタさんの「私」へ踏み込み過ぎてはマナー違反でしょう。

イタリアを代表する児童文学作家ジャンニ・ロダーリの短編『星へのエレベーター』に登場する 13 歳のウェイター見習いロモレットくんも、ちょっと厄介な常連さんを相手にするとき、てんやわんやの出前道中については口をつぐみ、パールの従業員としてしれっとした顔を保つことを選びます。お客さんである老ヴェナンツィオ侯爵のご注文に応じて、今すぐにビール 4 本とアイスティーをお届けするにあたり、本当は使っちゃいけないエレベーターにこっそり飛び乗ったら、そのままロケットみたいに吹っ飛んでしまい、着地した先のジャングルで奇妙な猿に取り囲まれたり、地球外へ迷い出て月のクレーターを間近に眺めたり、たといいろいろあったとしても、瞬間移動並みの速度で到着できなかった理由を問い詰められて答えたくないと思えば、きっちりバウンダリーを引いておいたらいいいんです。ロモレットくんはちゃんと冷えているうちに前品の品を届けたんですから、それで十分。仕事はきっちりしています。

とはいえ、私がそんな大冒険をしたら、誰彼かまわず一から十までお話してみたくなっちゃいそうなものです。お気に入りのロモレットくんがたまに不在のとき、空想癖のある新人ウェイター見習いに出前を頼んでしまって、荒唐無稽な言い訳をたっぷり聞かされることになるヴェナンツィオ侯爵の視点でアナザーストーリーを書いたら、おもしろくなりそうでしょうか。ロモレットくんを宇宙に連れて行ったエレベーターを日常使用しているヴェナンツィオ侯爵は、いつも真っすぐ自分の部屋がある階に到着できているのでしょうか。登場人物や舞台となる場所などの構成要素を入れ替えてみて、そこから新しい推進力を得たおはなしが転がる先を観察するのは、ロダーリの推奨するところですので、実験してみる価値はあるでしょう。

また、目の前にいるバリスタさんが、開店前にエレベーターで地底旅行から帰還していたとしても、私たちお客さんにはあずかり知らぬことですよ。ロダーリ的なまなざしをもって街をうろつくのって、本当に愉快的なことです。



【クレープ専門店ふたごのたまご】

<参考文献>

『パパの電話を待ちながら』 ジャンニ・ロダーリ/内田洋子訳、2009 年、講談社

Italiano compatto Dizionario della lingua italiana, a cura di Anna Cattana, Maria Teresa Nesci, 2010, Zanichelli editore s.p.a Bologna

(元当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>